『東照社縁起』の基礎的研究（承前）

曽根原　理

【目次】

一　諸本
二　書名
三　系統（真名縁起）
四　真名縁起　訓読・注釈（上巻）
（以上前号）
真名縁起　訓読・注釈（中・下巻）
五　系統（仮名縁起）
付　前号の補訂
（以上本号）

四（前号から続く）

真名中巻

御遺告に云ふ、「我聞く、幼くしては先師に受く、長じては遠国に訪ぬ、円教の肉身は転にして捨にはあらず、(62)と。若し爾らば、遷化せば即ち陰界入を毀傷せしめず、速かに日光山に移すべし」云々。或るひと曰く、「彼の麓に橋有り、終焉の砌は時日を経ざれば渡らざるが古法なり」。仰せに云ふ、「其の故は何か」。答へて云ふ、「『古記』

に云ふ、勝道天平宝字の比、当国薬師寺に於て大唐の鑑真和尚并びに弟子如意僧都と恵雲律師に見え、共に先づ律徳に随ふ。天平神護元年乙巳九月下旬、大剣の峰に到る。同二年丙午三月中旬、巓頂に上りて四方を顧みれば、北の山に当たりて四色の雲、常に空中に聳ゆ。奇異の思ひを作し、経像を負ひ尋ね求め、終に当山の麓に至るに一大河有り。嶺岩蛾々として銀水碧々たり、渡らんと欲するも輒からず。時に三帰并びに聞持の呪を誦し観念するに、即ち河の北涯より化神一人出来す。其の姿夜叉の如く、長け一丈余り、左手を腰に接し右手に二蛇を握る。化神厲声を出して道に告げて曰く、我是れ深沙大王なり。昔玄奘三蔵渡天往還のとき、流沙を渡し奉る。今又た上人此へ来れば、即ち渡し奉らんことを欲し二蛇を放たん、と。蛇即ち迸り河上を渡る、其の形紅霓の如くして忽ち橋道を作す。即ち教へに依り蛇橋を渡る。北涯に届くや、已に化神并びに竜橋は没して見へず、と(63)。爾来橋の本に深沙大王社を建て、今に至るも尊重して神橋と号し下乗するなり」。重ねて仰せに云ふ、「橋の功徳を尋ぬれば、江河は是れ往還の難処にして旅客愁歎す。霜雪の寒朝には人馬煩ひを成し、雨露の降暮には洪水浪を挙ぐれば、之れを渡すを善根と為す。其の上、釈尊安居後の金銀水精の橋、天台石橋を始め、何の橋か渡らずして功徳を為すや。殊に法橋は、生死の大海を渡り涅槃の岸に至るを本懐と為し、而して深沙尊重の故なり。尤も渡天の砌、深沙大王出現し玄奘守護の相貌は何の伝に見ゆるか」。答ふ、「『慈恩伝』に云ふ、玄奘赴き渡るの時、深沙大王因りて西路の険悪を説く。沙河の阻遠にして、鬼魅熱風に遇ふて免がるる者無し。徒侶衆多猶ほ数ば迷失す、況や師単独にして如何行くべき。願はくは自ら料量し身命を軽んずること勿れ、と。奘報へて曰く、貧道大法を求めんが為西方へ発趣す。若し婆羅門国に至らずんば終に東帰せず。縦ひ中途に死すとも悔いる所に非ざるなり、と。胡翁曰く、師必ず去らば我が馬に乗るべし。此の馬伊悟を往還すること已に十五度有り、健にして道を知る、と(64)。奘則ち馬に乗りて行くに、流れ十里許りあり、両岸闊丈余にして傍らに梧桐の樹叢有り。胡人乃ち木を

斬り橋と為し草を填め馬を駆りて過ぎ、奘既に渡りて喜ぶ。[65] 猶ほ奘進発せんと欲するに、孤り砂漠に遊び、唯だ骨と馬糞等あり。漸く進む頃間に、忽ち軍衆数百隊の沙磧の間に満つるもの有るを見ゆ。たちまち行きたちまち息み、皆な裘褐馳馬の像及び旌旗槊纛の形、貌を易し質を移し忽ちに千変す。遥かに瞻にして極著、漸う近くして微かなり。奘初めは覩て賊衆たりと謂へり。漸う近づき見れば滅す、乃ち妖鬼なることを知る。[66] 日本猿楽の能に無宜の得意有り。而れども沙河の間に至れば、夜は則ち妖魑火を挙げ爛なること繁星の如く、昼は則ち驚風沙を擁し散ること時雨の如し。諸悪鬼奇状異類人前に達し、観音を念ずと雖も全く去る能はず、此の経を誦し発声するに及び皆な散ず。[67] 但だ称名をのみ誇ること莫かれ、三蔵已に爾なり、況や常人をや。三恵具足せずんば輙ち得益し難し、抑揚宜しく分別すべし。此れ等の難百千も備叙能はざるなり。然りと雖も深沙大王の加護を蒙り往還恙無し、委しくは彼の伝に見ゆるか」と。仰せに云ふ、「和漢諸典に分明なり、若し爾らば或は百箇日若しくは一周忌を迎へ、大織冠の如く日光山に移すべし」云々。

僉な曰く、心浄ければ仏土浄し。[68] 若し一念法界の悟を開かば、蟭螟巣の上、螻蟻塚の下、皆な是れ毘盧遮那遊化の栖なり。然れば則ち沈々たる海底、高々たる驪山、皆な是れ本覚寂光宮なり。至人出没豈に地を択ばんか。[69] 或るひと云ふ、諸皆な差即無差・無差即差を知らず、無作三身寂光に住する時爾なり。三眼三智九界を知見し和光同塵を論ずるの日、何ぞ地を択ばざるか。一切補処定めて都率に住し、三世諸仏は中国に下る。天台大師云ふ、仏は中道を好み中天に昇り中日に中国に降り中夜に滅す、皆な中道を表すなり。[70]

御遺告に任せ、神輿を舁き奉る。御山を見るに、初夏と雖も黒髪に雪積み白髪翁たりしが、神力自在に感応道交して、日光の氷解け旧苔の鬢を洗ひ、無生を観じ懺悔目前に顕る。色に定体無く心の所変に随ひ、心に清濁有り分かちて浄穢と成る。故に大権現此の山に垂迹するは、境智冥合、函蓋相応なり。

夫れ当山の古記・弘法大師の碑文を勘ずるに、蘇巓鷲嶽異人の都する所、達水竜坎霊物斯に在り、所以に異人ト宅し、所以に霊物化産す。[71]又た、霊仙何者かを知らず、神人髣髴として在るが如し。歳精の記すこと無きを忿り、王侯の遊ばざることを惜しむ。[72]然れば則ち諸賢聖衆住山を為すと雖も、建立は勝道を以て先道と為す。神は救蟻の齢に邈なり、意は惜嚢（裹カ）の歯に清し。聚洛の轟々を厭ひ、林泉の皓然を仰ぐ。[73]諸神祇の奉為に、経を写し仏を画き、裳を裂き足を裹み、命を棄て道に殉ず。[74]仰ぎ願はくは、若しくは神明をして知ること有らしめん、願はくは我が心を察し我が図写する所の経及び像等、当に山頂に至り神のため供養し、以て神威を崇め群生に福を饒すべし。[75]発願し訖り、白雪の皚々たるを跨ぎ、緑葉の璀璨たるを攀じ、脚を踏むこと一半にして身は疲れ力竭き、憩い息むこと信宿、遂に其の頂きを見ゆ。[76]其の外勝道の権化諸記に見ゆるも、今は弘法の当山碑文記なり。伝教・慈覚の記は、広きが故に之れを略す。

慈覚大師の本身、叡岳に住しながら分身散影の徳を備へ、[77]諸国を巡見し寺社を建立し、和漢に亘り親しく仏神に謁し、其の相比倫を絶す。日域の国師、漢朝の国宝たり云々。会昌五年武宗仏法を毀つ。緇素皆な之れを歎き、大師の法力を仰ぎ再び漢朝の法命を続ぎ、三宝を盛隆し仏日を重興せんとす。三武僧を滅するも僧滅せず、一韓仏を摧くも仏何ぞ摧かれん。故に大師揚州に在るの時、節度使李徳裕遠遊を慰め珍宝を施す。大師長安を辞するに、中散大夫揚敬之・国子祭酒李元佐、及び衆官皆な曰く「我が国の教法和尚に随ひ東ゆく、斯の方道を志す者、後には当に日本国に入るべし」。元佐送護すること四十里、日晩同宿す。[78]袂を分かつに臨み曰く「和尚の衲衣願はくは我に施与せよ、時々頂戴し以て離緒を慰めん」。仁衣を脱ぎ之れを与ふ。然して帰朝するの時、当山に登り権現に謁し奉り、仏神の所栖仏法の霊場たるに依り、大唐国青竜寺法全和尚伝ふる所の『金剛并蘇悉地経』、『金字法花経』、善無畏三蔵菩提樹念珠・八葉唐鏡、海中現生弥陀四接の所座の蓮華一葉、揚州国司進める所の海竜王赤

衣等を持ち、権現に施入し奉る。山頂に至り一宿を経、中禅寺に下り、船に乗り遊行して湖南に至る。岸に崎有り、薬師像并に日光・月光・十二神将等の像を刻み、薬師寺と名づく。天竺耆婆医王より一行和尚に至るまで相伝する所の薬壷、其の寺の中心に埋む。(79)建立し了りて、権現を滝尾の麓に謁し奉り、山王を崇め奉りて神宮寺等の堂社を立て、財施・法施備足す。以降、伝教・弘法・慈覚・勝道其の外和漢の知識建立せしむと雖も、但だ慈覚の法流のみ尚ほ盛んなり。

倩ら以ふに、東照権現御在世、曾て此の山を詣でず、記録にも見えず。仏神・賢聖等合掌し此の霊場を所栖と為す、是れ宿命智たるべし。併しながら権者の化現顕然たり。然れば則ち奇なるかな、初め御住山の時仏法僧等飛来し、黄昏より後夜に至り鳴くこと卅日、其の声高く山谷に響き聴く者感を催す。古へ日域聖人聖徳太子御遷化の砌、一鳥墓に来り鳴くこと百日、世挙げて墓鳥と称し、人皆な奇妙と為す。(80)況や仏法僧鳥をや。されば先聖詩に曰く「後夜に仏法僧鳥を聞く　閑林に独り座す草堂の暁、三宝の声一鳥、一鳥声有り人心有り、声心・雲水倶に了々」(81)、古今以て瑞鳥と為す云々。

御遺告に云ふ、「予思ふ事有り、日光山に移らざる前に、先に久野に置くべし」云々。謹んで之れを案ずるに、「思ふ事有り」とは別事に聞く、久野を補陀落山と称す、守護神は摩多羅神なり。而るに日光山奥院亦た同名同神なり。是れ亦た兼ねて御存無し、不思議の出合なり云々。

或いは又た、弘法大師瀧尾の瀧に於て不動石刻像を感得す。其の節慈覚大師小野寺に於て不動尊判行す。両大師文を以て通ぜられ、使僧中途に於て相逢ひ、文を挿み事由を告ぐ。其の所を文挿里と号す。両尊像相合はすに、宛たかも符契の如く、少しも相違せず。弘法大師曰く「我れ得る所の像是れなり、慈覚大師先生所造たるべし」、(82)感涙肝に銘じ殊勝なり云々。之れに就きて妙事有り。上古より当山大社の御本地悉く皆な一紙判行有り。新宮は

千手、本宮は馬頭、瀧尾は弥陀等之れを相配す。然れども薬師像独り余るに、今東照権現御本地に配当す。寔に一体分身の権化、誰か疑滞を残さんか。

　夫れ当山は元二荒山と名づく。惣じては時節定まらざるも、別して春秋二八間悪風強く起り万物を破損し、天地震動して有情を悩乱す。寒暑時ならずんば則ち疾疫あり、風雨節ならずんば則ち歳飢う。肆に嘉名もて日光と改む[83]。君子は黎民を哀憐し、神社を崇め時節反逆の難を祈る。天は寒暑を以て徳と為し、君は仁愛を以て心と為す故なり。賢臣は仏閣を尊重し、人衆疾疫の難を禱る。君臣道を合はせ、万民掌を合はせ、財施・法施祭祀怠慢無く、所以に三災共に消え、天下弥よ豊饒たり。然りと雖も、世衰へ事変じ、心性弥よ愚かにして、善悪因果を弁へず、邪見放逸自らを損ひ他を害す。法味漸う廃れ、祭祀亦た疎く、仏天の責日々来り、衆生の運命夜々尽く。竜神忿りを成し、地震洪水年を累ね、悪政悪気を生み、悪気災異を生じ、則ち螟虫の類気に随ひて生じ、虹蜺の属政に因りて見ゆ。治道下に失はれ、則ち天文上に変じ、悪政民に流れ、則ち螟虫野に生ずるなり。肆に未来記を勘ずるに、吾れ滅に入るの後七百余歳の時、或いは邪法を以て正法に混じ、或いは邪義を以て正義を猥りにし、或いは三乗教を以て一乗理法を破り、或いは末代無戒の時を称及し持戒の比丘・比丘尼を謗り、或いは当世の作法と号し先徳の法則を猥りにし、或いは私に新宗を立て古賢の宗義を壊し、或いは無智の男女有り法の邪正を判じ、或いは世法に耽著し師匠の悪名を高め、或いは種々の妄語を説き吾れ能説法の人と謂ふ。人師と遇ふことを成すも、或いは無一法と計り虚無の見に堕し、或いは万法常住を求め刹那生滅の道理を弁ぜず[84]、或いは異形・裸形の僧尼有り、神社仏寺を穢し如来の正法を滅ぼす。此の時に及び王法の威軽く、七難世に起く云々。爰を以て前に源君、重玄の門に入り倒じて凡事を修し[85]、世間に出世道を行ひ、深く禅定に入り十方仏を見、和光同塵の砌を鑑み当国に垂迹す。諸神威光を増し霊地に化を施し、東照徳暉を輝かし、民安く国穏やかにして、万々

寿域を守り、将に一家繁茂を恣にし、源に還りて歌ふのみ。

伝へ聞く、我が国溟漴の滄海に三輪金光有りて浮浪す(86)。天地開闢し陰陽割れ判かるるに、三輪金光、同じく三光神聖其の中に化生して以来、先づ以て神国たり。所謂日域を根本と為し、異国を枝葉と為す(87)。神世万々に及び、人皇千々に至るも、一刹利種系聯禅譲して未だ嘗て移革せず、相胤亦た然り、閻浮界の裏豈に是の如き至治の域有らんか。印度・支那の書籍も未だ此方の醇淑有らざるなり(88)。誠なるかな、「瑞穂の国は吾が子孫の王たるべきの地なり、皇孫就きて治せ、宝祚の隆へ天壌と与に窮まること無からん」(89)。又た神祇宜しく蒼生の災いを退去せしむべきなり。源君亦た清和天皇の胤続きて断ぜず、当代において弥よ昌へ、天下の政を佐け、敬神を以て国営と為し、祭礼を以て国法と為す。惣じて神は天地と共ならずして共なり。天共ならざれば則ち日月星辰無し、地共ならざれば則ち五行万物無し、人元神無くんば則ち運命無し。宗廟・社稷共一霊なり、誰か之れを崇敬せざらんや。但し神道に就きては流々有りと雖も、本迹を立つるは三国の風俗にして、神の本は仏なれば仏尊ぶべし、仏の本神と為せば神敬ふべし。本迹殊なれりと雖も不思議の一なり(90)。幸いなるかな、我が神漸う二十一年を送り建立の時に相当す。肆に秋元但馬守泰朝を始めとして諸奉行に課し、堂社・仏閣一宇を残さず金銀を鏤め、善を尽くし美を尽くす云々。但し恨むらくは、御建立の間日数幾くならず。

先記の如く、当山を二荒と号す。時節を論ぜず風雪荒く、境地六月満天の雪と謂ふべし。而るに御普請中寒天たりと雖も、毎年と替り暖ならず寒ならず。所以に朝に霜を払ひ暮に星を戴き、人夫として奉行として各奉仕するが故、御諚の如く堂舎・仏閣悉く造り畢んぬ。併しながら御神慮、亦た将軍の御信力故と、人皆な之れを感ず。

鳥羽院御願得長寿院、崇徳院御宇長承元年壬子二月十六日勅願御供養なり。公卿僉議、廿一日午一点に定めらるるに、其の時に及び大雨・大風共に夥しく、故に延引す。其の後又た同廿五日、氷雨大いに降り延引するなり。

禅定法皇曰く、昔此の如き義供養度々延引す、時に甚雨陰谷流刑にして堂舎供養有らば大いに歎き思はれ了んぬ、と。[91]一日供養の天気、猶ほ爾なり。況や毎年権現の御祭礼、宵に雨降り山昏きも、暁天に至り雲開き天浄し。廿余年終に怠慢無く、神威尤も奇妙なり。伝へ聞く、澄憲禁中に於て雨を祈る。上一人より下万民に至るまで、当座の効験に信仰涙を顕す。而るに平相国笑ひて曰く、人病ひ休む比、医者験有り。春の比より旱にして、五月雨の節に相当して雨を祈る、全く澄憲の名誉には非ざるなり、と。或いは意趣を構え、或いは偏執を成すの類の前、是非に及ばず[92]云々。

『法花』に云ふ、名称普く無量世界に聞こゆなり。[93]

高祖智者云ふ、内徳深く広ければ、外徳普く聞こゆなり。[94]

震旦皇帝曰く、名は翼無くして長く飛び、道は根無くして永く固まるなり。[95]然れば則ち、異国より大権現に燈爐を献じ奉る。之れを見るに続命燈なり。惣じて諸仏神社に亘ると雖も、別して世に七難九横起くる時、医王善逝の続命法は三国共に勤修其の一なり。

東照権現御本地薬師如来と知り奉る、則ち「名称普く聞こゆ」なり。知らざれば則ち不思議観応と名づく。万事出合い斯の如し。

しかのみならず、朝鮮より信使有り。自身の信力を以て参詣し奉る。境地堂社信仰尋常ならず。茲に因りて日光山に於て草案を致し、重ねて清書を遂げ、三嶋より之れを賜る。其の文に曰く、

東武の諸山望裡遥かなり　日光周匝独り岧嶢　天真境を開きて金殿に挑み　洞仙源を劈いて玉橋に駕す　鈴響は却て旗脚に随て動き　篆烟新に雪華に惹して飄る　地は人勝に因て今方に験有り　功烈千秋未だ寂寥ならず

又た、

行々霊橋に到て馬鞍を卸す　雲梯万丈迥に攀じ難し　渓辺の水は琴を操て弄するに似たり　峡裡の天は井に坐して観るが如し　信ぜず人間に霊境有ることを　寧ろ知らん海上に神山を見る　塵蹤誤て桃花洞に入る　仙翁に九転の丹を借んと欲す

丙子臘月念二日　　　　正使　白麓

急雪驕風万木顛り　乱雲飛瀑金田に到る　橋頭に俯瞰すれば南冥尽き　檻外に平臨すれば北斗懸く　必ずしも福庭に妙訣を尋ざるも　自ら応に吾輩即ち真仙なるべし　東西目を極むれば寰区小なり　還て笑ふ査に乗て漢年を説く

中峯縹緲として雲孤を遏め　寂歴たる杉松帝都に近し　璧琳宮に転じて浄域を開き　橋玉蝀を回して霊符を閟づ　曾て聞ならく秘籙三山の紀　宛かも真形五岳の図に対す　夜深て須ひず鼓吹に驚くことを　看れば予れ箕坐して天衢に嘯く

日祇園を照して霽色寒し　万峯玉の如くにして危欄を捧ぐ　麟毫半ば捲て諸天近く　璧戸遥に分て碧海寛し千樹の影回て金殿静に　万鈴の声徹として鉄囲残る　仙遊尽くさず登臨の興　雪層崖に満て踏遍の難

中天の寺刹嶙峋を圧し　東照長く法像の真を留む　白馬尚ほ金鎖の甲を懸け　紅雲全く玉宮の神を露す　千齢の力は山河を鎮して定め　百戦の功は宇宙に垂て新なり　権現極て知る同一揆　宏図寧ろ復た前人に譲らん

親く万甲を提て西方に出て　剣客黄金尽く装を解く　一び怒て山河掌握に帰し　百年の天地煕康に属す　空に当り玉蓋遺像を開き　座を繞る金縄瑞光を擁す　飛騰総て生民の為に計る　権現の雄名已に雁行す

畳嶂烟銷して暁日紅なり　化城登眺長風に倚す　波光迥に接す滄溟の濶　岳勢遥に連なる富士の雄　絶頂の霊

杉積雪を凌ぎ　層崖の乱瀑晴空に落つ　明朝節に仗て西南に去り　方丈の仙遊一夢の中
仙都の衆木総て芬芳　伝道の霊杉太荒よりす　気扶桑に接して黛色を増し　影丹桂に通じて清香を播す　虬鱗
百丈霄漢に挑げ　翠葉千齢雪霜に傲る　夜に入り簫笙絶頂に来り　願は高処より鸞凰に駕せん
杖錫西のかた白馬より廻り　法容相対す雨花の台　空に摩す日月金輪転じ　華を繞る風烟鉄鉢催す　獅座共に
推す迦葉の妙　凰毛誰か識らん恵雲の才　他年兜率宮中に見ゆ　笑ひて問ふ桑田変ずること幾回ぞ
時崇禎丙子季冬　　　副使　東溟稿

屭屓たる霊鰲海瀾を障り　蹁躚たる仙鳳雲間に立つ　上頭の杉檜千古を伝へ　半腹の雲烟九寰を隔つ　士峰に
対起して北国に雄たり　江戸を抱回して東関を鎮む　却て忘る万里の帰途の遠きを　又た肩輿を借りて此山を訪
れん

日光山
山霊我の層台に上るを邀へ　綺席前に臨む万仞の崖　天外の霓裳王母至り　空中の羽蓋老君来る　帰鳥彩に動
て瓊戸を窺ふ　海若波を吹て玉杯に凸なり　三珠を披払し香蘂散ぬ　人間半夜雪千堆

日光寺
盈々たる一水塵縁を隔ち　曲々たる奔流岸辺を繞る　何れの日か茅竜絶磵に横ひ　時有りて巣鶴層顚に舞ふ
天台の石路諸洞に通じ　河漢の銀橋列仙を会す　此去真を尋ね知ること遠からず　誰か鉄鎖を将て高懸を解かん

山菅橋
寺殿の崔嵬翠空に聳え　霊旗粛々として寒風に起つ　雄心の躍馬遺像を存し　顕号の尊神大功を見ゆ　已に覚

ゆ山河有数に帰し　定て知ぬ基緒無窮に到る　晩来暘谷晴旭に騰り　彩靄常に浮ぶ万壑の中

東照殿

三生の仙契前因有り　一笑して相看れば意便ち親し　爐火丹を錬る師の道骨　鬢霜白を垂る我が陳人　霊草を評さんと欲せば憑訳し難し　試に香茶を揀し賓為に勧む　別後逢迎す蓬島の上　瀛州の清浅幾千春

大僧正

峰頭の玉井天漢に接し　帝女波を揚て素光に溢る　白日陰崖雷勢壮たり　玄冬の氷壑帯形長し　曽て廬岳飛竜の句を吟じ　今蓬萊隔海の郷に到る　那ぞ謫仙の斗酒を携へて　渠と同く新章を賞和するを得んや

瀑布

丙子臘月上浣　　従事　青丘

尾張大納言源義直卿御宮を建立し寺院を構ふ。権現勧請の夜、日光山に於て御殿夥しく震動し、凱風颯々、光明赫々、傍家以為へらく失火かと。社僧・社家・神人等驚覚し、肝を消して平伏す。紀州大納言源頼宣卿御遷宮の時、日光又た先の如し。時に各御宮降臨影向の瑞相なり。覚知す、前に同日尾州社頭に於て光り物三つ飛んで寺に入る、住持権僧正珍祐并に同宿共に之れを拝す云々。客来り云ふ、「神は是れ無相法身の体理、明晦寒暑無く、古往今来無し、云何が出没するか」。答ふ、「無相なるが故に常に現れず、神力の故に出現す。又た天台智者大師云ふ、又た如来の室を薫法界と名づく、慈善根力真際を動かさず、和光の塵垢なり[96]」と。客又た云ふ、「諸神も爾るや」。答ふ、「当社を始め奉りて諸神も爾なり。然れば伝教大師宇佐八幡に詣ずる表白に、夫れ平等大会の究極一乗は、真実の中の真実、甚深の中の甚深なり、故に四華を因門に散らし、法性円珠を酔客に示し、六動を果地

に振り至極宝所を疲商に訓ず。花厳聾啞の人、法説の鏡を鑑みて仏の知見を開き、方等敗種の倫、譬説の池に入りて法性の蓮を履く。阿含会座陋の輩、此に於て相好の分を得、般若教貧窮の子、今日法王の宝を掌る。奇なるかな、唯一の涼風三草を靡かせ仏恵に帰せしむ。大なるかな、無上の甘雨二木を洽し智地に趣かしむ。誰か思はん、決定性の乾地も仏性の水を得ながら、一闡提の焦種も頓に菩提の芽を萌ゆることを。文殊答へて曰く、助発実相義と云ふは、釈尊自ら説き、我が法の妙にして思い難きを宣ぶ、深く致すこと無きには非ず。天子讃へて最大法輪と云ひ、多宝の証皆な是れ真実と唱ふ、良や所以有るなり。講じ竟りて、神託して曰く、法味を受けざること久しく歳花を歴。今微言を聴き、何ぞ以て徳に報いん。我れに法衣有り、願はくは嚫達を表さん。乃ち斎殿を啓き紫衣二領を推出す。神官・巫祝各相謂ひて曰く、我等未だ掌(嘗カ)て斯の如き霊感を見ず云々(97)。之れに就きて物語有り。昔叡山一夜にして枯れること有り。大衆驚き山王御宝前に詣ずるに、山王神託して云ふ、夫れ過去七仏より以降、三災劫火に壊せず、仏法流布の霊場なるが故此の山に迹を垂れ、影の形に随ふ如く修学者を守護せり。而れども近年、観念・誦経疎く、止観の床に塵積む、寂光の都に帰らんと欲す云々。時に老師進み出て、先づ今の表白を捧げ奉るに、一夜にして旧の如く青山と成る、と云々(98)。

客来りて曰く、「権教の修行、前に其の例有るか」。

野云ふ、「仲算大徳『心経』を那智瀧に講じ、千手親ら懇念の前に顕る。行教和尚『般若』を宇佐宮に講じ、三尊忽ち忍辱の袂を現す(99)」。

客曰く、「権は所謂権謀、暫く用ひ還りて廃す(100)。何ぞ守護せんや」。野曰く、「妙位に登らんと欲するに、行に非ざれば階ならざるが故に、種々の形を以て諸国土に遊ぶなり。其の上神に権実守護神有り云々。所詮、此れ乃ち開説の通より一代倶名の妙法を指す、冷煖自ずから知らるる云々」。

客、礼を作して去りぬ。

真名下巻

夫れ法性凝寂にして、心に帰して通ぜずといふこと靡く、智地玄奥にして懇誠を感じて遂に顕はるるなり。(101) 所被の機に於て、惑に厚薄有り、根に利鈍有り。機感厚き仁は頓に願ひ満ち、薄き人は遅れて益を得。然れば則ち、征夷大将軍源氏長者家光公は、幼くして貞敏を懐き長じて神情に契ふ。松風・水月未だ其の清花に比するに足らず。仙露・明珠誰か能く其の朗潤に方べん。故に覚徳行有り、万物資行成らざるは無し。

伝へ聞く、大樹仰せに云ふ、予五濁の時に当たり将軍の家に生まれ、公武憒鬧に携はり、広く諸典を聞かず。然れども纔に因果の理を明らめ、聊か邪正の差を弁ふ。人心面の如く各々不同、孝道亦た区なり。何をか是とし、何をか非とせん。泥洹真法の宝、衆生種種門に入るが如し。倩ら思ふに、二十四孝の類、在世の時は人に依りて可なれども、遷化の後は労にして益無し。若し爾らば、法施を以て真孝と為す、是れ亦た金言なり。大舜の象耕、孝感花報に過ぎず、丁蘭の木を刻むは、本地の果報を得ず。黄香が枕を扇ぐも、解脱清涼の風と為さず、孟宗が冬筍は、法喜禅悦の食に備へ難し。(102) 周の文王、一夜三たび起き其の寝を問ふも、生死長夜の闇を訪れず(103)云々。所詮財施・法施を捨てず、宜しく在るが如く礼奠を為し奉るべし。一法をも捨てざるが、名づけて妙行と為すに相契ふか。

江城殿舎を改作するに、天を尊び、道を重んじ、宗廟を先と為す。内の権現の境地を引くに、双鶴忽然として舞い来る。霊瑞偏に御信力の故なり。所以に大樹公の鈞命に依り、大僧正天海祝ひ奉ると云々。

再拝々敬白、惟れ当来今月今日、吉日良辰を撰定し、掛まくも忝なき東照大権現、同体異名の山王・日光、国家鎮守の諸社・宗廟、梵・釈・竜・天、峯々巓々護法善神、惣じて一万眷属・五万八千善女等に言す。征夷大将軍家光公、三業相応の誠を致し、白妙の御幣を捧げ、百味の礼奠を調へ、尊神に羞めんと欲す。清浄の勝地を改め縄張りを為んと欲する所、先立って虚空より双鶴飛来す。霊瑞感応、万民肝に銘ずること殊勝なり。誠なるかな、神明は外に無し、恭敬せば祭席に顕る、寂光は遠きに非ず、勤修せば道場に在り。

東照大権現、親ら鶴に乗り降臨・影向、掌を指すがごとし。鶴は是れ諸仙の乗なり、謂ふべし君子化するの鶴と。国主長久にして千歳の鶴を祝ふべし。『書』に曰く、宣帝即位し孝武の廟を尊び、代宗と為す。巡狩する所の郡国に至らば皆な廟を立つ。代宗廟に告祠する日に、白鶴有り後庭に集まるなり(104)。鶴は徳広きが故、略を取り記さざるなり、大奇云々。古伝に云ふ、勝道講師、弘仁七稔丙申四月日、日光山中禅寺に詣で、十七日夜念誦読経す。其の間大いに雨降り大地を洗ひ、湖水白浪を揚げ山林土地悉く振動し、更に日来に似ず。怪みを成し弥よ社壇前に於て恭敬礼拝し、経・呪を誦し法施を献じ、渇仰合掌せば、時に応じて嶽の動き静まり、異香地に薫り、忽然として化人鶴に乗り来る。天女の如く其の姿端厳美麗、玉冠瓔珞を以て身を飾るものあり、齢三十有余。一人は束帯に笏を把り衣冠正し威儀端厳、年五十有余にして髪は黒白半ばなり。一人は狩衣・白袴を着し武具を負ふ、形貌鮮白にして歳十五六計りなり。各鹿皮を敷きて列座す。其の外筵を隔て異類の神達扈従し、眷属前後囲繞して並び居り。勝道講師、跪踞して深く信心を致すなり(105)、と。其の時双鶴、山中の奥標茅原に今之れ有り。

「猶頼め　標茅原の一切衆生　我世の中に在らん限りは」(106)御詠歌山中に於て人皆な祝ひ唄ふなり。

抑も「榊葉に　七五三付けて」「神の社と祝ひ初めけん」(107)以降、神社を兜率の内院と号し、仏寺を金剛浄刹と名づく。敬神を以て国の栄とし、祭祀を以て国法とす。本地垂迹を紐し、神化を日域中に施し、霊祠を扶桑の境に

祐け、玉墻側に市を成す。金殿を崇めるの類、襟林の間踵を継ぎ、代々の聖主の御宇、世々の執政の時節、効験既に多く、勝利誠に新たなり。故に夜闇に旧宅を改め祭祀を作し、無数の天人を供養申し、罽賓沙弥旧杖を以て修造に加へ、非命の業を転じて長生府を佩く。小善猶ほ爾り、況や七珍を尽くし万物を投ずるにおいてをや。若し爾らば、征夷大将軍家光公、一天の風山に和し万歳の声を呼び、四海の浪静かにして水は千年を変ず。衆病悉除、便生智男の本誓誤らず、衆願満足せしめ給へ。喼々律令の如し(108)。

天海謹んで、東照大権現御宝前に言す。

鳥居は、地神五代正哉吾勝の時よりの称号なり、只だ神門なり。「千葉破る　神の鳥居を通りては　万の罪も消へ失にけり(109)」神歌謡ひ歩を社壇に運ぶは、穢土より清都へ赴く善巧なり。猶ほ胎内五位に就き習ひ有り。惣じて何れの道の門戸も、踏み入る処肝要なり。顕密禅に亘り、最初を一大事と為す、阿字門、無相門、中道実相門等なり。三重を立て、天地人三才、三世、三位了達なり。三道即ち三徳に転じ、三身満徳の義を顕すなり。

先づ、一の鳥居は木を用ゐ、東方発心門を表す。数里を隔て正門鹿沼に有り、傍門宇都宮、境に大沢山有り。諸山に秀で外郭四周幽遠なり。

二の鳥居は石を用ゐ、住上発心門と名づく。筑前国より万里の波濤を凌ぎ、運び載せ荷負ひ建立し奉る。意趣は信力深厚、堂社堅固、令法久住、国家不変ならん、不退の位を顕すなり。実義は則ち菩薩生死に於て最初発心の時、一向に菩提を求め、堅固にして動かすべからず、彼の一念の功徳深く広く崖際無し、如来分別説は劫を窮むるも尽くす能はざるなり。深く之れを思ふべし。

第三の鳥居は銅なり。相似観力に因り銅輪位に入り、初めて無明を破り仏性を見、宝蔵を開き真如を見るなり。在世所住、所在の意なり。

御宝前左右に房舎を立て、増す定恵の珠玉を添へ、弥よ利生の瓔珞を飾る。寺社の甍穏やかに、住侶勤めを専らにす。別しては仏神へ法楽の為、惣じては智目行足なり。鐘楼・鼓楼相対して大法鼓を撃ち大法義を演じ、晨鐘・夕梵二音を交へ、遺弟仏法を興し、尊師再演を喜ぶ。右に輪蔵有り。一切衆生をして結縁せしめんが為に、一たび回せば則ち手一切経に触れ功徳無辺なり。本尊は忝なくも補処の菩薩なり。垂迹の傅大士は高推聖境見を破り凡聖一如を示す云々。(110) 殊に法蔵は檐を並べ重々し。謹んで深旨を案ずるに、釈尊の説法五十余年を限り、阿難の結集後々百歳を沾す、誰か其の功徳を量らん。経教に非ざれば争か仏意に撤さん。因位の智力は極果に及ばず、天気蒼々なれど叡慮は量り難し。下位智豈に上位に及ばん。世出すに一致する道理なり。

楼門を見れば、参詣の輩幾千万を知らず、重門高楼閣男女皆な充満す、金言の如し。

神楽処に至れば、鼕々たる鼓の響き四智三身の耳を側だて、颯々たる鈴の音六道衆生の眠りを驚かす。

御供処の百味、飲食時々に新しく、

護摩堂の法味、修法刻々と備はる。

御本社を拝し奉れば、内陣の玉簾は関わること深く兜率の内院を表し、外陣の道俗は数有りて社壇に所無し。

御本地堂を詣ぜば、半ばは悲しみを抱き半ばは喜びと為す。悲しむ所とは、君御在世の時、月卿・雲客左右に陪従し、役仕僮僕前後を囲繞し、影の形に随ふ如く忠節を尽し、君恩を蒙り国を領し家を興し、一方に使臣たり。女衆は宿善徳海を誇り、飽くまで源君の恩波に浴す。三千列を備へ専ら一天に威を振い、薫馨尽くること無く、光彩余り有り、猶ほ唐の太宗の栄花を一生に開くに似たり。春秋忽ち無常の風に随ひ、漢の明帝寿福を千年に期す。秋月虚しく必滅の雲に隠れ、世間の習ひ長き別れを告ぐ。近きと雖も満月の顔色を相見ること無く、魂一たび去れば遠からざるに御旋に預からず。嗚呼昔見し人已に無く、今聞く類も忽ち去ぬ。剰へ玉殿の釆女君を惜しみ髪

を切り、宝閣の忠臣環を捨て冠を脱す。春を迎ふるも愁ひの声未だ止まず、秋を送るに涙の雨未だ乾かず。花を見るも昔の花に非ず、月を望むも古の月ならず。(11) 怨むべからざるを怨み、歎くべからざるを歎く、只だ是れ源君に別れ奉るが故なり。喜ぶ所とは、御本地薬師如来を拝し奉り、妙覚朗然として形殊に珍しく、仏果円満の相是れ新しく、面貌端正秋月の雲を出るが如く、白毫赫耀春日に天晴るるが如し。青蓮の眼鮮やかにして慈悲の相を現し、丹花の唇厳かにして愛敬の咲を含む。尊容堂々、威徳巍々、聖衆星の如く列り医王の尊体を嘆じ、諸天雲の如く集り微妙の音楽を奏す、仏を見るの功徳豈に唐捐ならんや。観るに夫れ衆僧威儀を整へ、御本地経を読誦し、緇素合掌し、一心に頂礼す。予も心を静め聴聞す。我は此の名号、一経其れのみ。衆病悉く除き、身心安楽ならしむるなり。貴なるかな、称名念仏の行者尚ほ易行と号す、何ぞ況や聞きて即ち益を得るにおいてをや。奇なるかな、神農・黄帝の医術花他扁鵲の治病、一穴・両穴に過ぎずと雖も、名を聞き病を療するに及ばず。信ずべきを信じ仰ぐべきを仰ぐとは、此の尊の利益なり。脇立の体を拝見し奉るに、四大天王威を振ひ、昼夜聞名の人を衛り、七難を免ぜしむ。十二神将誓ひを発し、日時恭敬の輩を護り九黄を除き、日光・月光左右を囲繞し、法界迷闇を照らす。忝なくも大権現と現れ、広く衆生を度し御願力の船に乗せ、実報寂光の都に到らしむ。身を抛ち骨を砕くとも、何ぞ其の厚恩を謝さん。

奥院を拝し奉らば、山高く渓深く、青苔の道滑らかにして、往還の人希なり。静かに其の坂を見るに、名別義円教位を表す。四十二重に畳むは、名義倶円観位に約す。三十六段を積み、其の上一往大きく分け四十二品と為す。然れども其の品数は無量無辺、故に之れを登らば則ち惑分々に減じ、智分々に生じ、自ずから闇証誦文の見解を免れ、六即位展転して深細なること、方に乃ち是に顕るなり。三祇を経ず頓に薩埵の行を満たし、一念を越へず速に妙覚の台に至る。事に即して真、大悟忽ち開け、歩々増道し、声々損生す。最初天台智者大師の塔を礼

す、古仏曾て来り手を招くの地、隋唐の霊樹死して還生す。衆山低き処雲海の如く、人蒼竜の背上に向かひ行き、今之れを超過して無雲の天に生ず。金山飛鳥思はざるに金色と成る、此の山に登る者覚へずして天に生ず。塔の功徳を察するに、或いは其の位に非ざるに崇めて神と為し、或いは邪法を以て之れを祭らば、則ち必ず神明の咎有り。古へ海鳥を崇めて神と為すに、鐘鼓を畏み忽ち死す。潭竜を祭るに豕を殺さば、狐狸をして徒に飽かしむ。馬鳴帷を撥せば、鬼神去て口を閉ず。栴檀塔に礼するに、支提頽骸を露はす(112)。虚名久しくは立たず、謬旨終に失有るなり。之れに依り書籍を勘ふるに、月氏国罽膩吒王、外道の塔の七宝荘厳さるるを如来の塔と謂ふを見、偈を説き讃嘆して、一切智を具足し諸の欲障等を断除す、と云ふ。二行半偈を唱ふれば、其の塔即時に頽毀す。衆人之れを嘆ず、奇なるかな大王の徳力深厚なることを、此の邪塔を礼し其れをして毀壊せしむ(113)、と。之れを以て之れを思ふに、我が国王天神より神武に至り、胤続き種性断ぜざること漢朝に超えたり。然れば年々歳々忌辰に相当す。忝なくも天子手づから宸筆を染められ、或いは御経、或いは二十八品、御製御怠り無し。其の外摂政・関白・門跡方、歩を社壇に運び残らず奉幣し了んぬ。然して、権現の威光日に倍増し、当家の子孫弥よ繁昌す。堂塔堅固に、三社安穏にして、因地中に在りては前後有りと雖も、果海中に至りては会して一仏と成る。深義眼を遮る云々。

客来り云ふ、宮殿湯々、楼閣重々、金の幡蓋天に翻り、玉簾金色の台に巻き上がる。光は瑠璃戸に亘り、香を開き四方に薫る。竺・漢は知らず、日域は未だ見えず。剰へ高麗三使参詣し、目を驚かし讃嘆す。嗚呼、美なるかな妙なるかな。

倩ら案ずるに、茅茨は剪らず(114)、舟車は飾らず(115)、衣服は文無し(116)。過分は還りて国家の費えなるか。

野云ふ、汝世智は弁ずるも出世の功徳を知らず。金銀を抛ち道を行へば、則ち国富み民饒にして、万民快楽す。

一を以て万を取るなり。三宝を興隆し百姓を按撫するなり。所以に上は天から下は地まで、天人竜衆、聖王賢臣、誰か建立を為さざらん。七宝荘厳の十方浄土報土に影現するの化儀なり、全く国家の費えに非ず。殊に今般の造営は国役に非ず。恣に民を使はず、下行に預り妻子を育て万民歓喜す、職人も亦た爾なり。一往は君子の費えに似たりと雖も、楚人の弓の如し(117)、但し天下の弓か。

客云ふ、武帝の朕寺を起し僧を度すこと何の功徳有るか。麿云ふ、功徳無きなり。

野云ふ、功徳に両種有り。或いは漏と無漏と相対し、若しくは情執を破るか。禅門に入り参じ知る。

客云ふ、仏在世の日世尊に供養せば、受る者而れども施者として福を獲。滅後の形像は誰か是れ受る者ぞ。

野云ふ、諸仏如来は法身なり。若しくは在世・滅度、所有の供養は其の福異なり有ること無し。

客云ふ、物無くんば云何んが施与せん。猶ほ貧児の旧債を思ふが如し。然らば仏の施物何ぞ積聚せんや。

野云ふ、譬へば甘蔗の如し。未だ圧せざるの時は汁見るべからず。仏の獲る福も是の如し。客問ひ訊ねて退出す云々。

御神前に於て法華曼供す。

夫れ法華とは、教門を離るるの所詮、観心を超ゆるの所照、言語道断にして心行の滅する所なり。輒く説かば則ち法を破らん、不信なるが故に三悪道に堕ちん。我れ寧ろ説法せず、疾く涅槃に入り、過去仏行ふ所の方便力を尋念し、我れ今得る所の道亦た応に三乗に説くべし。是の思惟を作すの時、十方仏皆現れ、梵音に我を慰喩す、善きかな、尺迦文第一の導師、是の無上法を得、諸の一切仏に随ひ方便力を用ゆ。『大日経』に曰く、無相甚深の法は劣恵の堪へざる所、彼等に応ぜんが為の故に、兼ねて有相の説存す(118)。顕密共に法華は、無相甚理、言亡慮絶、有相の方便を用いざること有るべからず。是の故に説教多くして下根に附す。曼供御経供養を修すること法則の

如し云々。殊更法華真言他経に説かず、秘密と為すと雖も法楽の奉為なり、委しくは御願文呪願諷誦等の如し云々。山王大権現、天照皇太神宮の例に任せ、奥院に於て御授戒并に戒灌あり。夫れ戒は、運善の初章、却悪の前陣なり。肆に国王・王子・百官・宰相、比丘・比丘尼、十八梵天・六欲天子、庶民黄門、八部鬼神金剛神等、但だ法師の語を解せば尽く戒を受持す。貴なるかな、宿殖深厚なる人、聞かば信を起し証を取ること掌を反すが如し。悲なるかな、宿習薄浅なる人、聞かば謗を生じ獄に堕つこと箭を射るが如し。爰を以て『善戒経』に云ふ、此の菩薩戒は応に不信者に向け説くべからず、乃至、応に大乗を謗る者に向け説くべからず。若し不信ならば、此の因縁を以て地獄に堕つるが故なり(119)、と。『梵網経』に云ふ、衆生仏戒を受け即ち諸仏の位に入り、已に大覚位に同じ、真に是れ諸仏子なり(120)、と。明曠の疏に云ふ、「即ち位に入る」と言ふは、一切衆生皆な仏性有り、発心して三聚浄戒法を受くるを入仏位と名づく(121)。

問ふ、塔中釈迦伝戒の相如何。答へて曰く、塔中釈迦は、分身を集め以て垢衣を脱し、地涌を召し以て常住を示す。霊山報土にして劫火も壊せず、常寂厳土なれば無明豈に汚さん(122)。釈尊宝塔を開き、多宝と並座す。唯だ仏と仏のみ境地冥合し、前仏・後仏体皆な同じ。授職灌頂を論ぜば、霊山一会の大衆倶に寂光に居り、無作三身を顕す。権宗・権門の儀式に非ざるのみ。

抑も在世の化儀を尋ぬるに、諸仏出世を興すこと懸けて遠く値遇すること難し。如来の出世は曇花に比し、機縁仏感じること浮木に況ふ。一切衆生皆な解脱を得ば、我が願ひ既に満つ。優婆提舎は経の力用なり、所以に論義経を説かざれば、仏教頓に滅び弘通無し。然れば則ち、文殊・弥勒問答に依り衆会の疑念を散ず。智積別教に執し疑を為し、身子三蔵の権を挟み、竜女即成を顕すと難じ、一切衆生成仏の手本と為す、是れ亦た論義の徳なり。滅後の弘経を案ずるに、像末四依仏化を弘宣するも、根源に迷へば説教の元旨を混乱す。未だ四教八教権実

の起尽を弁ぜずんば、髣髴として月を看るが如し。忝なくも智者大師、親ら世尊の附属を受け、震旦に出世を興し、陳皇の御時瓦官寺に於て八箇年『法花』を説く、時に大建三辛卯七月二十日なり。光宅寺法雲法師、弟子は南三北七・十師の碩学に及ぶ。恵栄・法栄・法蔵・雲栄・才栄・歳恵・恵可・恵雲・光法・光雲を上首十人とし、伴僧倶に都合三百余人、天台大師に番ひ破せらるる。先づ光宅を難じ余は風を望めば、諸宗の徒党悉く天台大師に帰伏す。其の証具に別典に載するが故、此の疏中委しく之れを挙げず。具に『依憑集』に載す。[123]然りと雖も予め『依憑集』中三論嘉祥寺吉蔵大師の依憑、禅家第二祖恵可禅師天台大師に帰伏するの旨、『国清寺百録』に引けり。[124]『依憑集』の禅衆一百余僧を挙ぐるに、其の中の上首は吉蔵・恵可等なり。具さには『百録』と『大師伝記』に与る如し。

釈尊一代の仏法、四教五時を配立し権実を決定するは、皆な天台大師を以て明鏡と為し書籍を作す、諸宗の高祖たるなり。大極殿に於て『仁王般若』を講じるの次、諸僧勅を蒙り、梁・陳旧徳諸師皆な来り、激難鉾競、論談決択、終に悉く天台大師に帰伏す。何ぞ大権薩埵たりと雖も、破邪顕正併しながら仏行を輔くるの化義ならんや。

主上親ら衆中に於て起居三礼し、万乗膝を屈す。百高座の百官称美讃嘆し弾指殿に喧し。画賛に云ふ顔魯公作、陳・隋二代三朝の国師なり。[125]述賛に云ふ道證、蚩々として国宝と為し、赫々として四帝の師と号す。[126]王侯相将集会して語黙の益を蒙り、徒衆転た多くして済々有り。山谷に陰居すれども、名称普く天竺に聞こゆ。天台止観、含光に課し梵語に翻訳せしめ、諸論師披閲して大唐に向ひ礼す。文に云ふ、震旦小釈迦、『法花経』を広演し、一念に三千を具し、依正皆な成仏す。[127]日域諸神、法宿大菩薩を始め奉り、醍醐味を以て問答随喜の事上記の如し。なかん

ずく北野天神論義連歌を移し賞すなり。三業相応の白善、論談決択に如かざるなり。之れを以て之れを思へ。
東照大権現御在世の時、朝暮論義を翫ぶ、是れ亦た権者の験なり云々。
今般大樹公御参詣取り紛れたりと雖も、大会を闕くは、尊像を造り開眼無きに似る。故に五問十題を出す。
副　三惑時断
業　俗諦常住
右の意趣は、有情輪廻して六道に生ずること、猶ほ車輪の始終無きが如し、唯だ是れ引業に依るなり。故に三惑同時・異時を定め、三惑既に三観に即せば必ず深理に融するを顕し、即身頓悟の法楽に資す。俗諦常住とは、一代仏法の奥蔵、二十余家相派かるる異義の区なり。天台独歩の秘要、他師知らざる法門なり。伝教大師、慈覚大師に教誡して曰く、吾れ常に二諦不生不滅の旨を弘伝す、而るに世人偏に真諦不生不滅の義を信じ、未だ世諦不生不滅の理を解さず。汝此の義を以て世に流伝し円教を弘通し有情を利益せば、即ち止観・文義の骨髄を指し授くるなり。唯だ一大事の因縁と為す。而れば仏神歓喜し、王法・仏法の繁昌此の算に極まらん云々。(128)
殊に当山は慈覚大師の威風、三所権現の擁護を弘通するなり。何ぞ況や、東照大権現此の理に撤して、永く子孫を守り衆生を利益せんとの御誓願有り。旁た因聞に依り探出するのみ。

(62)　未詳。
(63)　『補陀落山建立修行日記』。『日光・二荒山』〈神道大系神社編三十一〉（一九八五）一一～一二頁。
(64)　『大慈恩寺三蔵法師伝』巻第一。『大正新修大蔵経』五〇、二二三頁中。但し、説く主体は深沙大王ではなく、胡人の「老翁」と表記されている。
(65)　同前、二二三頁下。

(66) 同前、二二三頁下。
(67) 同前、二二四頁下。
(68) 『維摩詰所説経』巻上。『大正新修大蔵経』一四、五三八頁下。
(69) 未詳。『百題』に「楞厳先徳」の語としてあり。
(70) 未詳。智顗説『摩訶止観』巻第三上に「仏は常に中道を好む、降胎・出生・出家・成道・入滅、皆中夜に在り」とある。『大正新修大蔵経』四六、二七頁上。
(71) 空海撰『沙門勝道歴山水蛍玄珠碑并序』。註（63）文献、一頁。
(72) 同前。同前、三頁。
(73) 同前。同前、一頁。
(74) 同前。同前、二頁。
(75) 同前。同前、二頁。
(76) 同前。同前、二頁。
(77) 未詳。
(78) 『慈覚大師伝』。『続群書類従』八下、六九〇頁。
(79) 伝尊鎮撰『円仁和尚入当山記』。註（63）文献、五一頁。
(80) 平氏撰『聖徳太子伝暦』下巻。仏書刊行会編『大日本仏教全書』一一二、三六頁下。
(81) 空海撰『続性霊集補闕鈔』巻第十。『三教指帰・性霊集』〈古典文学大系71〉（岩波書店、一九六五）四五二頁。
(82) 未詳。
(83) 例えば『瀧尾建立草創日記』に、二荒を日光に改めた経緯が見られる。註（63）文献、三七頁。
(84) 未詳。
(85) 湛然撰『妙法蓮華経文句』巻第九上。『大正新修大蔵経』三四、一二六頁下。
(86) 『山家要略記』に「厳神霊応章」または「神祇鑑典」からの引用として記される。『天台神道（下）』〈神道大系論説編四〉（一九九三）七頁・八〇頁・一〇二頁・一三四頁・一四三頁。
(87) 吉田兼倶撰『唯一神道名法要集』。『卜部神道（上）』〈神道大系論説編八〉（一九八五）七四頁。
(88) 虎関師錬撰『元亨釈書』巻十七・願雑二。『日本高僧伝要文抄・元亨釈書』〈新訂増補国史大系31〉（吉川弘文館、一九六五）二四二頁。

(89)『日本書紀』巻二・神代下。『日本書紀（上）』〈日本古典文学大系67〉（岩波書店、一九六七）一四七頁。
(90) 僧肇撰『注維摩詰経』序。『大正新修大蔵経』三八、三二七頁中。
(91)『源平盛衰記』巻第一。『源平盛衰記』（国民文庫刊行会、一九一〇）一頁。
(92) 澄憲の祈禱は『古事談』『古今著聞集』などにも見られるが、清盛の批評については『源平盛衰記』巻第三が詳しい。註（91）文献、六四〜七一頁。
(93)『法華経』巻第一・方便品第二。『大正新修大蔵経』九、五頁中。
(94) 未詳。
(95) 未詳。
(96) 未詳。
(97)「良有所以」までは『山家要略記（仙岳院本）』に見られる。註（86）文献、二〇三〜二〇四頁。また、神託や紫衣推出の話については仁忠撰『叡山大師伝』を典拠とし（日本大蔵経編纂会編『日本大蔵経』四六、二六二頁下）、『元亨釈書』巻一、『法華経鷲林拾葉鈔』巻一などに見える。
(98) 礼拝講の濫觴については『日吉山王利生記』第四など参照。『続群書類従』二下、六七七頁。
(99)『元亨釈書』巻四・巻十、などに見える。註（88）文献七七頁・一五二頁。
(100)『摩訶止観』巻第三下。『大正新修大蔵経』四六、三四頁上。
(101)『山家要略記』に「厳神霊応章」からの引用として記される。註（86）文献、一九頁。
(102) 全て『二十四孝』にあり。『御伽草子』〈日本古典文学大系38〉（岩波書店、一九五八）ではそれぞれ二四一頁・二四三頁・二五三頁・二四四頁。
(103) 未詳。
(104)『漢書』巻二十五・郊祀志第五下。
(105)『補陀落山建立修行日記』。註（63）文献、一四頁。
(106)『新古今和歌集』巻二十、釈教歌。『新古今和歌集』〈新日本古典文学大系11〉（岩波書店、一九九二）五五九頁。
(107)『拾遺和歌集』巻十、神楽歌。『拾遺和歌集』〈新日本古典文学大系7〉（岩波書店、一九九〇）一七二頁。
(108) 中世の祭文にしばしば用いられた呪文。奥野義雄「祭文にみる呪文『急急如律令』をめぐって」（『古代研究』一八、一九七九、後に『陰陽道叢書』4特論に再録）、田中久夫「端午の節供考―「急々如律令」と朱鐘馗―」（『藤井寺市史紀要』四、一九八三）など参照。

(109) 例えば、『神道三輪流廿四通』などに見られる。『真言神道（下）』〈神道大系論説編2〉（一九九二）三八頁。

(110) 未詳。たとえば、傅大士と輪蔵の関係については『神僧伝』巻第四などに見られる。『大正新修大蔵経』五〇、九七五頁中～下。

(111) 『伊勢物語』の「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」を踏まえるか。『竹取物語・伊勢物語・大和物語』〈日本古典文学大系9〉（岩波書店、一九五七）一一三頁。

(112) 未詳。

(113) 『付法蔵因縁伝』巻第五。『大正新修大蔵経』五〇、三一五頁中。

(114) 『韓非子』巻第十九・五蠹。

(115) 『春秋左氏伝』哀公元年。

(116) 未詳。

(117) 『孔叢子』公孫竜。

(118) 『大毘盧舎那成仏神変加持経』巻第七。『大正新修大蔵経』一八、五四頁下。

(119) 『大正新修大蔵経』三〇、一〇一四頁下。

(120) 『大正新修大蔵経』二四、一〇〇四頁上。

(121) 『天台菩薩戒疏』巻上。『大正新修大蔵経』四〇、五八五頁中。

(122) 註（86）文献、三四八頁、三六七頁、など。

(123) 最澄撰『依憑天台集』。註（97）『日本大蔵経』、九〇頁か。

(124) 『大正新修大蔵経』四六、八二二頁上か。

(125) 未詳。

(126) 未詳。

(127) 湛然撰『妙法蓮華経文句記』巻第十下（『大正新修大蔵経』三四、三五九頁下）が典拠か。

(128) 「吾常～利益有情」の部分は円仁撰『俗諦不生不滅論』に見られる（仏書刊行会編『大日本仏教全書』二四、九五頁）。それを引用する形で『慈覚大師伝』の記述があり（『続群書類従』八下、六八四頁）、直接の典拠となっている。

五　系統（仮名縁起）

真名縁起にならい、仮名縁起についても諸本の間の異同について調査を行った（ただし⑫⑬両本については今後の課題である）。主に①・②本の相違に重点をおいたため見落としも多いかと思われるが、中間報告として記す。管見の限り、以下の相違点が見られた（該当箇所が無い場合は｜、選択肢に該当しない場合は記述そのままで表示した）。

巻第一

（1）□□□画……「御立願」か「鳳来寺」か（①本一四〇頁第11行）
（2）掌をさすか□□く……「こと」か「如」か（一四一頁第4行）
（3）方に□□あるべし……「勝利」の有無（一四一頁第13行）
（4）□時に……「艮」か「即」か（一四二頁第4行）
（5）陣を□り……「は」か「張」か（同第5行）
（6）東の□……「の」か「野」か（同第7行）
（7）長篠に□いて……「を」か「お」か（同第12行）
（8）勝利を□……「え」か「得」か（同第13行）

巻第二

（9）小牧に□いて……「を」か「お」か（一四三頁第1行）
（10）恣にはからひ□……「て」の有無（同第3行）

(11) はたして□……「後」の有無（同第3行）
(12) 残し□き……「を」か「お」か（同第7〜8行）
(13) 関□原に至り……「か」の有無（同第9行）
(14) 関原□□図……「合戦」の有無（一四四頁第1行）
(15) いと□うとく……「た」か「と」か（同第17行）
(16) 駿河□□図……「観花」か「花見」か（一四五頁第5行）
(17) 蟻のことく□り……「同」か「固」か（同第10行）
(18) 謀反の□り……「お」か「を」か（同第12行）
(19) 遠江宰相□□頼宣……「中将」の有無（同第15行）
(20) かたく□やみぬ……「て」の有無（一四六頁第9行）
(21) □□□□画……「相国宣下」か「宣下勅使」か（一四七頁第3行）

巻第三

(22) 御□□□の……「はふり」か「はうむり」等か（一四七頁第6行）
(23) 当国久□山に……「野」か「能」か（同第7行）
(24) 日光山に移□へし……「す」の有無（同第8行）
(25) □の〳〵……「を」か「お」か（同第13行）
(26) 印諳に□しはかられて……「を」か「お」か（同第14行）
(27) 久能□画……「山」の有無（一四八頁第2行）

(28) 日光道□画……「行」か「中」か（同第14行）
(29) 勝道□□画……「登山」の有無（一五0頁第8行）
(30) 玄奘□□画……「渡河」の有無（一五一頁第1行）

巻第四

(31) 納□き給ひける……「を」か「お」か（一五一頁第7行）
(32) ゐみさか□ける……「へ」か「え」か（同第9行）
(33) 降臨し給□し……「ひ」の有無（同第11行）
(34) 時□至りて……「に」の有無（同第14行）
(35) たくみに課□て……「し」の有無（同第14行）
(36) 末代に及□ても……「ひ」の有無（一五二頁第3行）
(37) 行粧□ゝしく見ゆ……「美」か「ひ」か（同第10行）
(38) 朝鮮人□□画……「来朝」の有無（一五三頁第11行）

巻第五

(39) 天神地祇に□り……「祈」か「いの」か（一五四頁第3行）
(40) 花厳□画……「瀧」か「瀑」か（一五五頁第7行）
(41) 時のよろしきに随□所……「ふ」の有無（同第12行）
(42) □ひなる徳行あり……「覚」か「おほ」か（一五七頁第3行）
(43) あた□も符契のことし……「か」か「る事」か（同第4行）

（44）其国に王た□し時……「つ」か「り」か（同第8行）

（45）自□ら化し……「か」の有無（同第9行）

（46）勤たま□り……「え」か「へ」か（同15行）

（1）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
①	御立願	こと	無	艮	は	の（ゝ）	を	え	を	無	無	を
②'	鳳来寺	如	有イ	艮	張	野	お	得	お	有	有	お
③	｜	こと	有	即	張	野	お	得	お	無	有	置
④	｜	こと	無	即	は	野	お	得	お	無	無	を
⑤	｜	こと	無	｜	｜	野	お	得	お	無	有	お
⑥	｜	こと	無	即	は	野	お	得	お	無	無	を
⑧	｜	こと	無	艮	は	の（ゝ）	を	え	を	無	無	を
⑨	｜	こと	無	即	は	の（ゝ）	お	え	を	無	無	を
⑩	｜	こと	無	即	は	野	お	得	お	無	無	置
⑪	｜	如	無	即	取	野	お	得	お	無	無	置
⑰	｜	こと	無	即	は	野	お	得	お	無	無	を
㉒	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
㉓	｜	こと	無	即	は	野	を	え	お	無	無	を
㉔	｜	こと	無	即	は	野	を	得	を	無	無	を
㉘	｜	こと	無	即	は	野	を	え	を	無	無	を

13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
無	無	た	花見	同	お	有	有	相国宣下	はふり	野	無	を	を	無	行	無
有	有	と	観花	同	を	無	有	宣下勅使	はうむり	能イ	無	お	お	有	中	有
有	｜	と	｜	固	折	有	無	｜	はふり	野	無	お	推	｜	｜	｜
無	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふふり	野	有	を	を	｜	｜	｜
無	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふむり	野	無	お	お	｜	｜	｜
無	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふふり	野	有	を	を	｜	｜	｜
無	有	た	観花	固	お	無	無	宣下勅使	はふり	野	無	を	を	有	中	有
無	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふり	野	無	を	を	｜	｜	｜
無	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふり	野	無	を	を	｜	｜	｜
無	｜	た	｜	あつま	折	有	有	｜	ほうふり	野	有	を	を	｜	｜	｜
有	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふふり	野	有	を	を	｜	｜	｜
｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	はふり	野	無	お	を	｜	｜	｜
有	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はふり	能	無	を	お	｜	｜	｜
有	｜	た	｜	同	お	有	有	｜	はうむり	野	無	を	を	｜	｜	｜
有	関原巻二	た	御花見	固	お	有	有	相国宣下	はふむり	野	無	を	を	｜	自久能至日光道行	｜

30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
無	を	へ	無	無	無	無	ひ	無	いの	瀧	無	覚	か	つ	有
有	お	え	有	有	有	有	美	有	祈	瀑	有	おほ	る事	つ	無
｜	置	へ	有	無	無	無	美	｜	祈	｜	有	おほ	かも	り	ミつから
｜	を	へ	有	無	無	無	ひ	｜	いの	｜	有	覚	か	つ	有
｜	置	へ	有	無	無	無	美	｜	祈	｜	有	覚	か	つ	有
｜	納給ひ	へ	有	無	課せて	をゐても	ひ	｜	いの	｜	有	覚	か	つ	自化し
有	を	へ	無	無	無	無	ひ	無	いの	瀑	無	覚	か	つ	無
｜	を	へ	無	無	無	無	ひ	｜	いの	｜	無	覚	か	つ	無
｜	納給ひ	へ	有	無	課せて	をゐても	ひ	｜	いの	｜	無	覚	か	つ	自化し
｜	納給ひ	え	有	無	課せて	をゐても	美	｜	いの	｜	有	覚	かも	り	自化し
｜	を	へ	有	無	無	無	ひ	｜	いの	｜	有	覚	か	り	有
｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	無	｜	｜	｜	｜
｜	納給ける	へ	有	無	課せて	おいても	ひ	｜	いの	｜	無	覚	か	つ	有
｜	｜（2）	へ	有	無	｜	無	ひ	｜	いの	｜	｜	｜	｜	｜	｜
玄奘三蔵渡天	納行ひ	へ	無	無	無	をゐても	美	朝鮮人参詣	いの	花厳之瀧	したかふところ	覚	か	へ	有

46　え　へ　へ　へ　へ　へ　え　え　え　へ　へ　ー　え　ー　へ

以下、目につく点について触れておく。

まず第一に、②'本の表記が他に見られないのが六箇所（10・18・31・36・38・43）、②'ともう一本のみが十四箇所（1・5・12・14・16・21・23・27・28・29・30・32・40・42）ある。そのほか表記には加えなかったが、②'にだけ見られる表記が九箇所ある。(3) 他にこれほど独自な表記の本は見られないことから、②'本の特殊性が窺われる。

そして、「②'ともう一本」の分布を見るなら、⑧と共通が八箇所（14・16・21・27・28・29・30・40）、③と共通が二箇所（5・42）、⑪（1・32）が二箇所、⑤（12）・㉓（23）が各一箇所、である。⑧本については、真名縁起の系統を考察した際は①本と一致した。それが仮名縁起の場合、むしろ特殊な②'本に近いようにも見られる。だが、両書の一致の内容を見るなら、それは全て絵の画題であることが分かる。一方、本文の部分ではかなりの程度①本と一致するように見える。あるいは、⑧本は画題のみ参照するものがなく（添付折紙のため、註1参照）、手近な②本（東京帝国大学蔵本）を参照したのかもしれない。

次に、表記を超えて意味を持つ箇所として、（22）に注目したい。(4) ①③⑧⑨⑩㉒㉓の諸本の「はふり」は、漢字に当てれば「祝」になるだろう。それに対し、他は「葬」である。前者は家康を神に「祝う」観念に基づく。一方、後者はそれを拒絶する意義を持つ。(5) 前者がより原型に近い表記であることは言うまでもないだろう。

真名縁起と異なり、仮名縁起については多様な表記が見られ、調査不充分の現段階で、にわかに系統づけを行うことは困難である。今後調査を進めることで、さらに考えていきたい。

（1）小松茂美編集『東照社縁起』〈続々日本絵巻大成　伝記・縁起篇8〉（中央公論社、一九九四）を底本とした。なお各画題については、同書解説（神崎充晴氏執筆）中に原本に添付されていた詞書の筆者目録（折紙）の写真が掲載されており、それによった。なお、①′本は次の点で①本と相違する。一四一頁第5行「侍り」（①本行り）、一四二頁第4行「即時」（良時）、一四三頁第7行「小将」（少将）、一四五頁第10行「同固り」（同り）、一四七頁第9行「移し」（移へし）、一五〇頁第9行「鬼魁」（鬼魅）、一五七頁第8行「たゝし」（たつし）。

（2）この箇所を含む前後に、他本と大きく異なる記述が見られるので記す。「中にも大僧正天海ハ祭文を持て殊更に祝ひまいらせられしをはやりて内陣にひめをき給ひける其中の詞には……文代宗の廟をまつれる時には、鶴の来しなともあひに逢たる事共也」。

（3）法界にひら「き」（①′本一四七頁第14行）、移しま「ゐ」らすへき（一四八頁第1行）、清浄の堂□（舎なし、同第16行）、時「に」至りて（一五一頁第14行）、は「え」ある御事とも（一五二頁第11行）、自「ら」信し（一五七頁第9行）、自「ら」なる（同前）、勝地にお「い」て（同第15行）、人皆「華」蔵世界（同第17行）。なお②・③本にのみ見られるものとして、妖怪「お」のつから（一五〇頁第16行）、③本にのみ見られるものとして、かの「お」しへに（一四九頁第8行）、は「う」ある御事とも（一五二頁第11行）。

（4）実際、③本には「葬」のルビが見られる。

（5）例えば、浦井正明『もうひとつの徳川物語』（誠文堂新光社、一九八三）九二～九九頁を参照。

付　前号の補訂

六三頁　28島原図書館松平文庫本（5―14）……（筆者未見）

↓巻頭「東照宮御縁起」、題簽「東照宮御縁起」

和装本、斐紙袋綴、一冊　縦28・0cm×横20・1cm

内容：仮名縁起一～五

奥書なし

参考：「武州河越三芳野天神縁起」と合綴、黒印「尚舎源忠房」朱印「文庫」あり

七一頁　註（1）

↓（追加）一二六頁第4行「寒暑不時□疾疫」（①本では「則」が入る）、一二七頁第3行「下」（不）、同第6行「数」（幾）、一三〇頁第6行「浄」（浮）、一三二頁第5行「入」（人）、一三五頁第3行「難」（歎）、一三八頁第2行「未」（末）

八三頁　註（3）……未詳

↓『出曜経』巻第二。『大正新修大蔵経』四、六一六頁中。源信『往生要集』大文一に引用され広まる。『源信』〈日本思想大系6〉（岩波書店、一九七〇）三九頁。

同　注（7）……未詳

↓安然『真言宗教時義』巻第二に「若し美華を見て本尊を念ぜざるは蓋し是れ不修の甚しきなり、若し冷風を聞きて内身を観ぜざるは亦た是れ観行の闕けたるなり」とあり、これを踏まえた表現と考えられる。『大正新修大蔵経』七五、四〇九頁中（原漢文）。

（一九九六年十二月一日）